

## 展示品一覧

### ○ 文化元年中図（東北地方）

「沿海地図（上）陸奥・出羽」 国宝：地図・絵図類 番号3、縮尺216,000分の1、194×221 cm

文化元年8月1日に上呈した日本東半部沿海地図の中図の伊能家控図である。左上の日本海の余白部に、北極出地度里程測量の一覧表を載せている。一覧表の最初に記されている川崎の場合、地名欄に「武蔵国橋樹郡 川崎宿」、北極出地度の欄に「三十五度三十二分」、道路里程の欄には深川黒江町からの距離を「五里一十四町二十四間 外二里一十一町羽田廻」と記載している。

### ○ 文化元年中図（関東・中部地方）

「沿海地図（中）東海道・北陸道・東山道」 国宝：地図・絵図類 番号4

縮尺216,000分の1、194×228.6cm

日本東半部沿海地図の中図の伊能家控図である。平成26年度に修復して展示可能な状態になった。しかし、中央部の三分の一がカビのようなもので劣化しており、富士山からの方位線も判然としない。

### ○ 文化元年中図（北海道南東部）

「沿海地図（下）蝦夷地」 国宝：地図・絵図類 番号5 縮尺216,000分の1、172×230cm

日本東半部沿海地図の中図の伊能家控図である。第一次蝦夷地測量の松前からニシベツに至る測量の成果が描かれている。当然のことながら、この中図で気になるのは襟裳岬や厚岸湾である。該当部分のアメリカ大図をプリントアウトして較べてみると違いがよくわかる。厚岸湾付近から「不測量」の文字が記され、測線が無くなっている。それにもかかわらず「クナシリ」の3地点を中図上に確定している。

おそらく、「オアカン（雄阿寒岳）」と「メアカン（雌阿寒岳）」のそれぞれの位置を「ヒロヲ（測量日記ではビロウ、広尾）」と「クスリ（釧路）」の2地点からの方位線で確定する。下の模式図のニシベツ近くのA地点は雄阿寒岳への方位が「酉一分半」、雌阿寒岳への方位が「酉初分」で位置が確定できる。

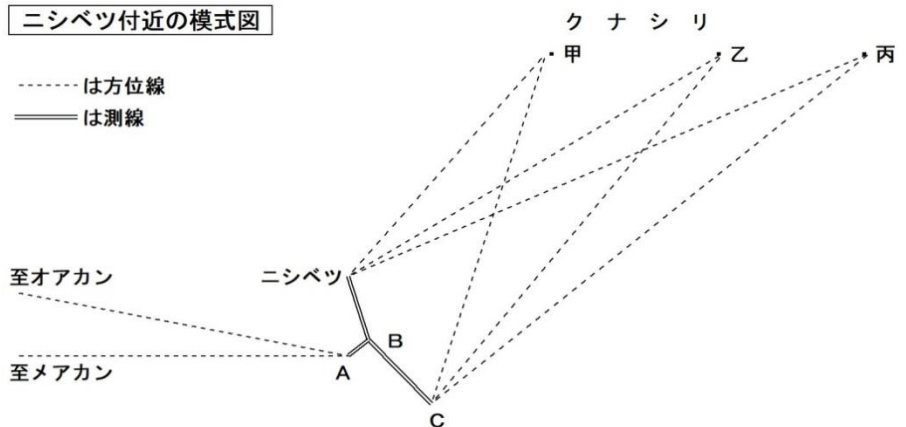
『測量日記』の寛政12年8月8日の記事に「十間縄を以、クナシリ、ネモロ、ノツケ其外所々の方位を測」とある。これは、A地点からB地点、B地点からC地点、B地点からニシベツについては、歩測ではなく「十間縄」で正確に距離を測定し、方位を測定することで、基準となるニシベツとC地点を確定する。ニシベツは天測をしているので緯度も「北極出地四十三度二十三分」と確定できる。その上でニシベツとC地点から国後島の甲、乙、丙の方位を測ることで国後島の位置を確定したのではないか。中図上では厚岸湾以東ではここだけに、ニシベツ、A、B、Cを結ぶ測線が書き込まれている。なお、「ネモロ（根室）」については地名は記されているが方位線がない。根室はニシベツとC地点の延長線上に近く、位置を確定できるほどの方位角の差が出なかったのであろう。

文化元年中図3幅は壁面に展示されているので、細部を見るためには最短合焦距離が近距離のミュージアムスコープが不可欠である。

なお、徳島大学附属図書館HPの「貴重資料高精細デジタルアーカイブ」の「伊能図」の「沿海地図 下」でも細部を確認できる。この徳島大学の中図は展示中の記念館中図と同様に文化元年以上呈本の副本である。針穴があり、地名や方位線の情報が詳細である。

ニシベツ付近の模式図

----- は方位線  
===== は測線



## ○ 大図（秋田県：大仙・横手・湯沢）

「**自白川至出羽国図 第五〈自湯沢／至堺〉**」

国宝：地図・絵図類 番号80 縮尺1/36,000

享和2年7月17日に湯沢を出立して横手の本陣に止宿、18日には大曲を過ぎ花館村に止宿、19日に堺村に止宿した。翌日には久保田城下（秋田市）に到着する。

## ○ 大図（秋田県、山形県：新庄）

「**自白川至出羽国図 第四〈自名木沢／至湯沢〉**」

国宝：地図・絵図類 番号79 縮尺1/36,000

7月11日以降の測量成果である。12日には新庄城下に逗留したが、「暮に山々暗に付、町外へ出て月山、鳥海山等を測る」ことになった。その測量記録を展示している。

## ○ 「山嶋方位記」

「**享和二壬戌歳 沿海日記 山嶋方位記**」 国宝：文書・記録類 番号2

測量地点は新庄城下大手より脇で、そこから鳥海山などの方角が使用した測量器具ごとに記録されている。「中」、「小」、「甲」、「丙」という4つの器機を使用している。「中」は中方位盤、「小」は小方位盤（杖先方位盤、彎窠羅針）、「甲」「丙」は半円方位盤か。

『山嶋方位記』の見方については『会報』第47号に佐久間達夫氏の解説がある。

## ○ 大図（山形県：上山・山形・天童・尾花沢）

「**自白川至出羽国図 第三〈自中山／至名木沢〉**」

国宝：地図・絵図類 番号78 縮尺1/36,000

7月7日の中山村以降の測量成果である。上山城下に宿泊したが、測量日記に「**北城下は入口先払等はなし。会津、米沢より不丁寧なり**」と不満気である。8日の山形城下では一転して「**北城下入口より足軽先払、町役人棒突大勢出る**」となった。

第3次測量からは、幕府公用に準ずる扱いになっただけに、各藩の対応に神経質になっているようである。9日は「**左は田地一里半二里田地見ゆ、其間に最上川の流あり**」という測量行である。10日は尾花沢の本陣に宿泊して、11日には新庄に向う。

## ○ 大図（山形県：檜原・米沢・南陽）

「**自白川至出羽国図 第二〈自大塩／至中山〉**」

国宝：地図・絵図類 番号77 縮尺1/36,000

7月3日に大塩宿を出立し、檜原大峠を越えて米沢に向う。明治21年に磐梯山が噴火し檜原湖が誕生したことで、檜原宿は水没した。米沢街道は喜多方から大峠を越えて米沢に向うルートに変更された。米沢街道は出羽三山参りでも利用されたいた。この日の測量日記に「**佐原より湯殿山参詣の者に出逢。佐原へ書簡を遣す**」とある。

## ○ 大図（福島県 白河・会津若松）

「**自白川至出羽国図 第一〈自白川／至大塩〉**」

国宝：地図・絵図類 番号76 縮尺1/36,000

6月22日に白河を出立して、若松城下をへて、7月2日に大塩宿までの測量成果である。大塩宿には「塩の沸井」があった。好奇心旺盛な忠敬は「塩炊きもの」に質問したところ「**一釜へ塩水二石を入、五釜十石の水にて塩五斗を取と云**」という答えであった。

『会報』第47号の松宮輝明氏の「伊能忠敬と会津街道」はこの区間の実地調査記録である。



## ○ 大図（新潟県：村上）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第二十〈自網代／至大川〉」

国宝：地図・絵図類 番号36 縮尺1/36,000

第三次測量の後半、日本海沿岸を南下し新潟県村上市に入ると「笹川流れ」として知られている海岸が11km続く。村上市観光協会HPでは「優れた変化に富む海岸美は、海浪による激しい浸蝕作用によるもので、奇岩・怪岩・孤島・洞窟・開門等の奇観が織り成され、特有の風致を見せます。」とあり、国指定名勝天然記念物とのことである。9月19日の測量日記で「舟にて海岸海中を望めば奇岩奇石おほく、山麓岩上の奇松、絶景無類なり」と絶賛している。しかし、測量日記には、連日「大難所」の文字が続いており、大図でも海岸線を離れて測線が引かれている個所が確認できる。

三面川を渡り瀬波村から風景が一変し、海岸砂丘列が続くなだらかな砂浜が始まる。岩舟には琵琶瀉（岩舟瀉）とよばれる瀉湖が描かれているが現在は埋め立てられて存在しない。右の模写本では判然としないが、展示されている伊能家控図では、砂浜は黄、崖は緑で描き分けられている。

## ○ 下図（新潟県：村上）

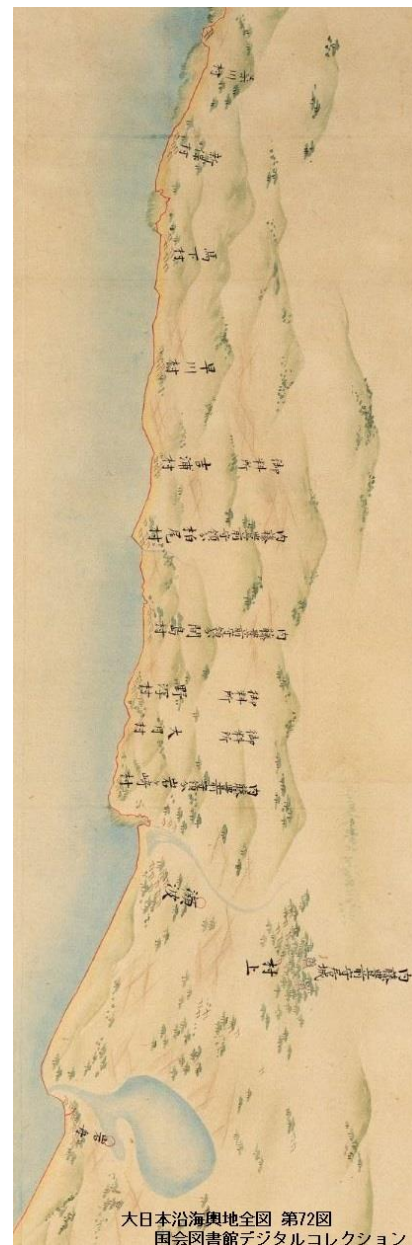
「自越後国岩船郡基石村至越後国蒲原郡村松浜下図」

国宝：地図・絵図類 番号258、縮尺1/36,000

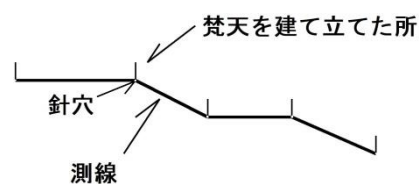
上記の大図の下図である。大図を作成するために必要な下図の情報量の多さに圧倒される。村松浜と中村浜の境界からは方位線が海上の粟島や飯豊山などに向って23本引かれている。

左は国会デジタルコレクションの大図に下図の情報を朱書きしたものである。下図は「大川」から「芦谷寒川村境」までの区間について、野帳のデータをもとに積算した縦軸「六寸四分五厘五毛」と横軸「三寸四厘」を朱線で引き、始点と終点を確定する。始点の「大川」から次の梵天までを縮尺にしたがって長さを求め、方位を合せて折れ線を引き、これを繰返して「芦谷寒川村境」までの測線が完成する。

「笹川流れ」では梵天の位置を示す1mmほどの線が密集した場所が多く見られる。針穴があることが信じられないほどの密集ぶりである。一方、南側の海岸線は梵天の間隔が広い。下図の梵天の線の粗密からもこの区間の海岸地形の違いが分る。



大日本沿海輿地全図 第72図  
国会図書館デジタルコレクション



## ○ 「測量日記」（享和2年9月20日）

「享和二壬戌歳沿海日記」 国宝：文書・記録類 番号72

忠敬が上記2図の地域の村人たちを「人品古風にして敦朴なり」「貞実」と賞賛したことを測量日記から紹介している。この地域の海岸は大図や下図からもわかるように山が海に迫り「大難所」が続いている。6月に測量御用の御触れが届くと、村々では「山坂難所の道路を盆中の遊に普請し、或は新道を造りしよし」と記録している。さらに険阻で馬の通れる道もないので、長持ちの荷物は取り出して分けて、空の長持と共に人力で運ぶというのである。幸いなことに、この地域を測量した3日間は風波も無かったので、荷物は舟で村継ぎで送ることが出来て負担を軽減できた。「是は村々貞実の徳ならんと感じけり」と感想を記している。伊能測量隊を支えてくれた地元の記録を詳細に紹介したのが『会報』43～46号に連載された風間公吉氏の「越後岩船測量」である。